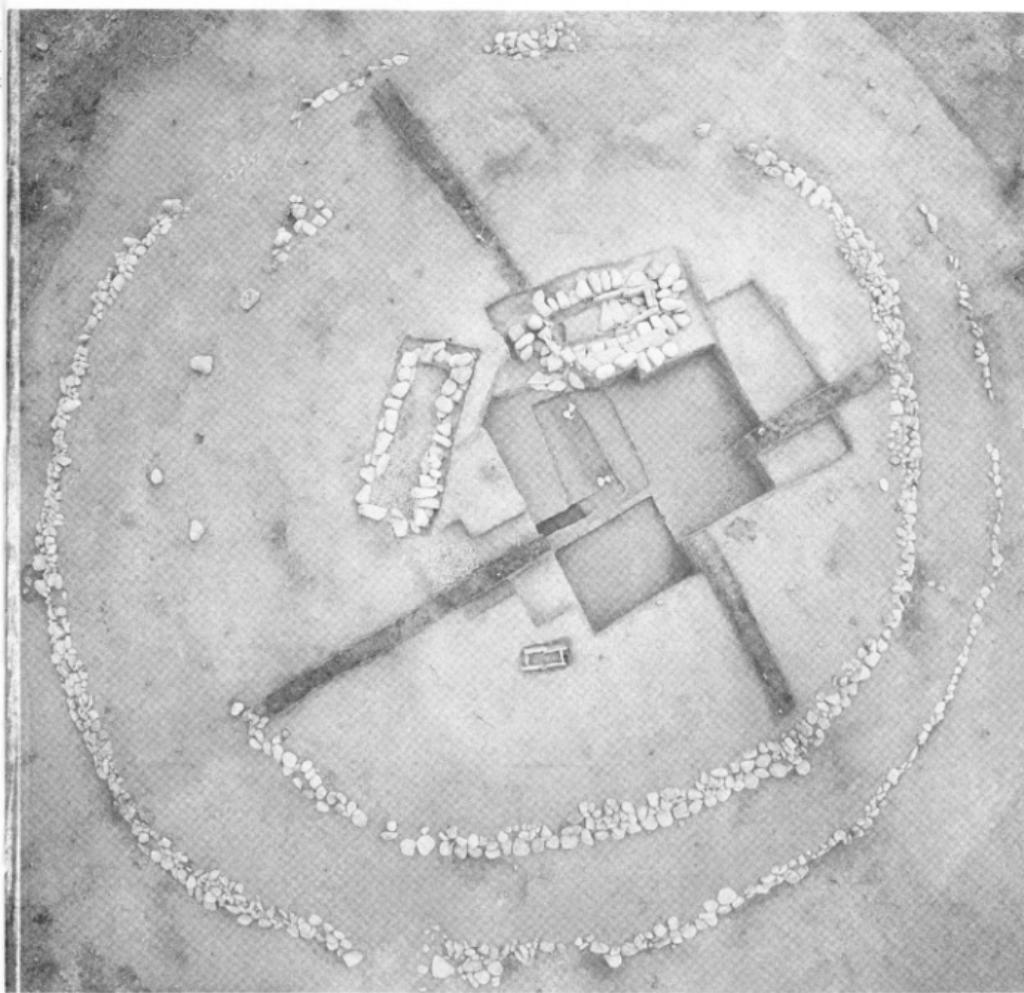


# 近長丸山古墳群



1992

津山市教育委員会

# 近長丸山古墳群



1992

津山市教育委員会

## 序

津山市は、中国山地の山側に形成された盆地の中央に位置します。古代から美作国の国府が置かれ、江戸時代には津山城が築かれ城下町として政治・経済・文化の中心として栄えてきました。そのため市内各所に多くの文化財が存在します。この城下町のたたずまいを色濃く残していた町並みも、昨今の宅地化や開発の波によりかなり変貌してきております。今回の調査はその波がかなり郊外へも波及したものの一端と言えましょう。

さて近長丸山古墳群は津山市の東部勝北町との境に位置します。3基の古墳からなり、特に1号墳は美作でも有数の規模を誇る円墳で2重に石を巡らしております。またその古墳内には6基の埋葬施設があり、特にその中心の埋葬施設からは鏡やヒスイ製の勾玉、鉄剣など多数の副葬品が出土しました。これらは当時の埋葬形態を研究する上での貴重な資料であります。

ここにささやかではございますが情報をいち早く公表したいという立場から、報告書を刊行いたしました。各位の御活用をいただければ幸いであります。

尚、末筆ではございますが発掘調査から報告書刊行に至るまで多大なる御協力をいただいた関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成4年 1月 31日

津山市教育委員会

教育長 森 定 貞 雄

## 目 次

I 遺跡の立地と周辺の遺跡	1
1 遺跡の立地	1
2 周辺の遺跡	1
II 調査の経過	3
1 調査経過	3
2 調査体制	3
III 調査の記録	6
1 近長丸山1号墳	6
2 近長丸山2号墳	20
3 近長丸山3号墳	22
4 その他の遺構・遺物	23
IV ま と め	25
1 近長丸山1号墳について	25
2 近長丸山2・3号墳について	27
3 近長丸山古墳群の形成と社会構造について	27

## 例

二

1. 本書は宅地造成に伴う近長丸山古墳群の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査経費はすべて事業者負担である。
1. 発掘調査は平成3年4月15日から6月17日まで津山市教育委員会文化課主事行田裕美、同主事小郷利幸が担当して行った。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また方位は磁北である。
1. 本書第1図に使用した「周辺遺跡分布図」は建設省国土地理院発行2万5千分の1（津山東部、橋）を複製したものである。
1. 本書の執筆は小郷が担当し編集を行った。また中世土器の実測には文化課職員平岡正宏の協力を得た。
1. 発掘調査にあたっては文化課職員の多大なる協力を得た。また遺物整理には家元博子、野上恭子、岩本えり子、赤坂博子、中谷幸子、田中裕子の協力を得た。
1. 出土遺物・図面等は津山市教育委員会・津山弥生の単文化財センターで保管している。

# I 遺跡の立地と周辺の遺跡

## 1 遺跡の立地

近長丸山古墳群は、岡山県津市近長字南丸山 668 - 4 番地他に所在する。津市の東部で岡山県の三大河川の一つ吉井川が最大の支流加茂川と合流し流路を南に変えている。この加茂川の左岸には南北に丘陵がやや途切れる鞍部を利用した陸路が幾つか通っており、この事からこの辺りが加茂川の水路と東からの陸路とを結ぶ要所であった事が窺える。古墳群はこの要所とも考えられる單独低丘陵上に立地し、頂部からは東方面の視界が開けており眼下に水田耕作地帯を見下ろす事ができる。遺跡の立地する辺りは標高は 114 ~ 120 m で、平野部との比高差は約 15m 程である。

## 2 周辺の遺跡

本遺跡周辺では縄文時代以前の遺跡・遺物についてはあまり知られていない。弥生時代以降になると加茂川を挟んだ丘陵上に遺跡が点在する。右岸北部では草加部工業団地に関する調査などで弥生時代中期からの集落遺跡の舶込遺跡（註1）、稻荷遺跡（註2）、上部遺跡（註3）東蔵坊遺跡（註4）などが、古墳では円墳 4 基の舶込古墳群（註1）、円墳 3 基の染瀬古墳群（註5）、ニレノ木南古墳（註6）、横穴式石室の東蔵坊 1 号墳（註4）、緑山 A 1 号墳（註7）などが調査されている。これらはいずれも小規模な円墳で、6 世紀から 7 世紀前半にかけてのものである。また、緑山遺跡（註7）では 6 ~ 7 世紀の製鉄遺跡が存在し、染瀬古墳群や緑山 A 1 号墳からは鉄滓も出土しておりこの辺りがその当時製鉄に関連していた地域であった事が窺える。

一方左岸では弥生時代後期の方形墓才ノ崎遺跡（註8）、古墳では前方後円墳（全長約 45m）1 基と円・方墳 3 基から成る近長四ツ塚古墳群（註9）、直径約 20m の円墳 2 基から成る夫婦塚古墳群（註10）、円墳 4 基の才ノ崎古墳群（註8）、大池ノ西古墳群（註11）などが存在する。また、本墳南側の丘陵上にも鏡の出土した一辺 21m の方墳・河面丸山 1 号墳（註12）があり、これらはほとんどが横穴式石室出現前のものである。また横穴式石室墳としては河面丸山 2 号墳があり陶棺が 2 基出土している（註12）。

（註1）工業団地造成に伴い 1976-78 年津市教育委員会が調査、報告書未刊。

（註2）中山俊紀・保田義治「小原 B・稻荷遺跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 35 集』津市教育委員会 1990 年  
（註3）安川崇史「上部遺跡発掘調査報告」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 30 集』津市教育委員会 1990 年

（註4）安川豊史「東蔵坊遺跡 B 地区」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 9 集』津市教育委員会 1981 年  
（註5）行田裕美「染瀬古墳群」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 13 集』津市教育委員会 1983 年

（註6）1976 年津市教育委員会が調査。6 世紀前半の木棺直葬の円墳。

（註7）中山俊紀「緑山遺跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 19 集』津市教育委員会 1986 年

（註8）中山俊紀「才ノ崎遺跡」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 18 集』津市教育委員会 1985 年、同「才ノ崎古墳群」『津市埋蔵文化財発掘調査報告第 23 集』津市教育委員会 1988 年



- |           |           |          |             |            |
|-----------|-----------|----------|-------------|------------|
| 1 近長丸山古墳群 | 5 ニレノ木南古墳 | 9 上部造跡   | 13 近長四ツ塚古墳群 | 17 河面丸山古墳群 |
| 2 緑山A1号墳  | 6 丸尾古墳群   | 10 稲荷造跡  | 14 オノ幹吉古墳群  | 18 上土居古墳   |
| 3 緑山造跡    | 7 鮎込造跡    | 11 狐塚古墳群 | 15 夫婦塚古墳群   | 19 愛宕神社古墳  |
| 4 薬瀬古墳群   | 8 東成坊造跡   | 12 片山古墳群 | 16 大池ノ西古墳群  |            |

第1図 周辺遺跡分布図 ( $S = 1 : 25,000$ )

(註9)「近長四ツ塚古墳」『津山市文化財』津市教育委員会 1983年

(註10)「津山市近長古墳群分布調査」『津山市文化財調査報告』第2集 1961・62年度 津市教育委員会

(註11)いずれも直徑10m以下の円墳で現在6基程存在する。

(註12)『津山市史 第一巻』原稿・古代 津山市史編纂委員会 1972年

## II 調査の経過

### 1 調査経過

平成3年2月16日付けで、津山市小原308-4番地、吉田道男氏から岡山県津山地方振興局長あてに、津山市近長字北丸山670-3番地他3平、面積約5,142m<sup>2</sup>にかかる「宅地造成に関する工事の許可申請書」が宅地造成等規制法第8条第1項に基づき提出された。この対象地は周知の遺跡ではなかったが周辺には古墳群が存在するため、あらかじめ埋蔵文化財の有無を確認するため分布調査を行った。その結果、古墳1基が確認されさらにもう1基存在する可能性がでてきた。そのため、まず同氏から平成3年3月14日付けで、文化財保護法第57条の5に基づく「遺跡発見の届出」が提出され、さらに同時に確認調査を行うための同法第98条の2に基づく埋蔵文化財発掘通知を同氏の承諾の元、津山市教育委員会教育長名で文化庁長官宛に提出した。調査に先立ち3月18日付けで「開発事業に伴う埋蔵文化財確認調査覚書」を締結し、確認調査を実施した。確認調査は4月15日から20日まで実施し、その結果新たに古墳1基が確認された。そのため古墳群の全面発掘調査を余儀なくされた。本調査にあたっては再度4月22日付けで、「開発事業実施に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する覚書」を同氏と締結し、調査を実施する事となった。調査対象面積は約1,000m<sup>2</sup>である。

古墳群は東側から1号・2号墳と仮称し、各墳丘に「十」字にあぜを設定し人力による表土剥ぎから行った。4月22日から1号墳の調査を行い全主体部を検出した後、5月30日に全景の航空写真を撮影した。6月1日からは2号墳の調査に入り、1・2号墳の間に新たに3号墳が検出された。そのため古墳は全部で3基となった。これらすべての調査が終了したのは6月17日である。尚、旧1~3号墳をそれぞれ近長丸山1~3号墳と呼称する。

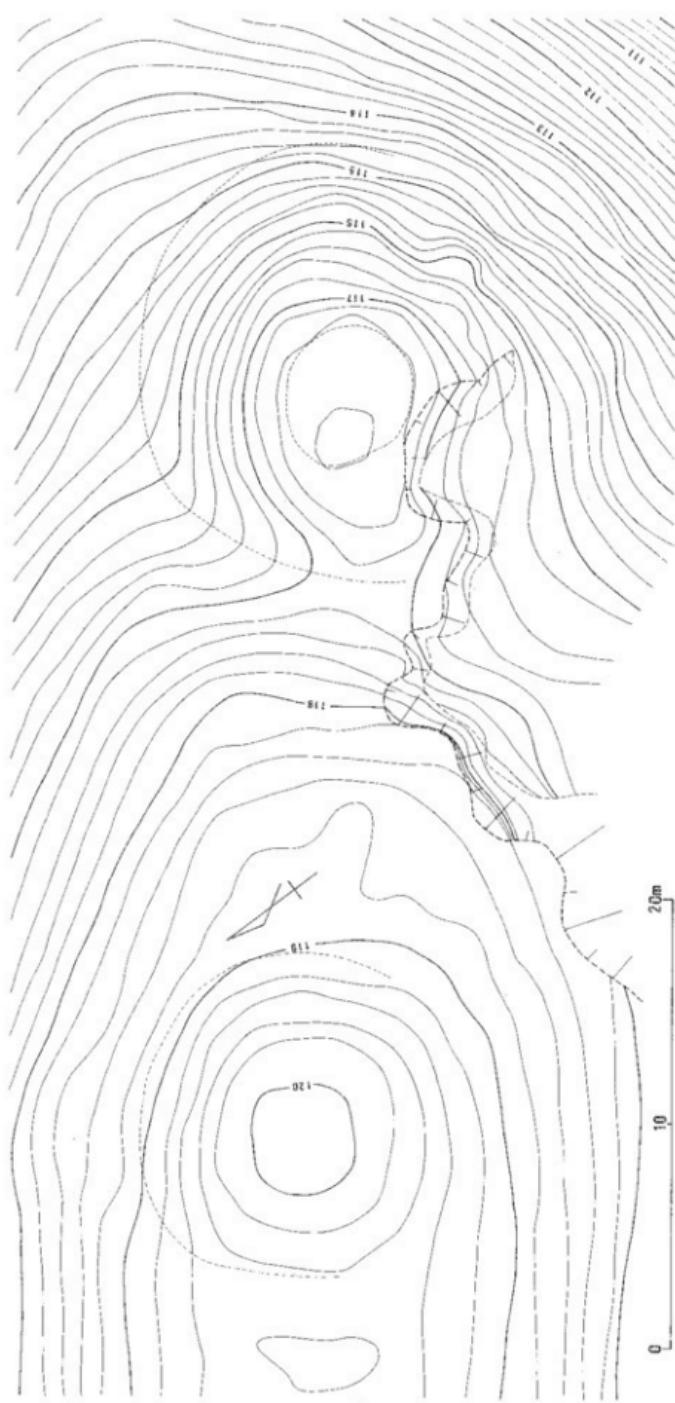
### 2 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は次の通りである。

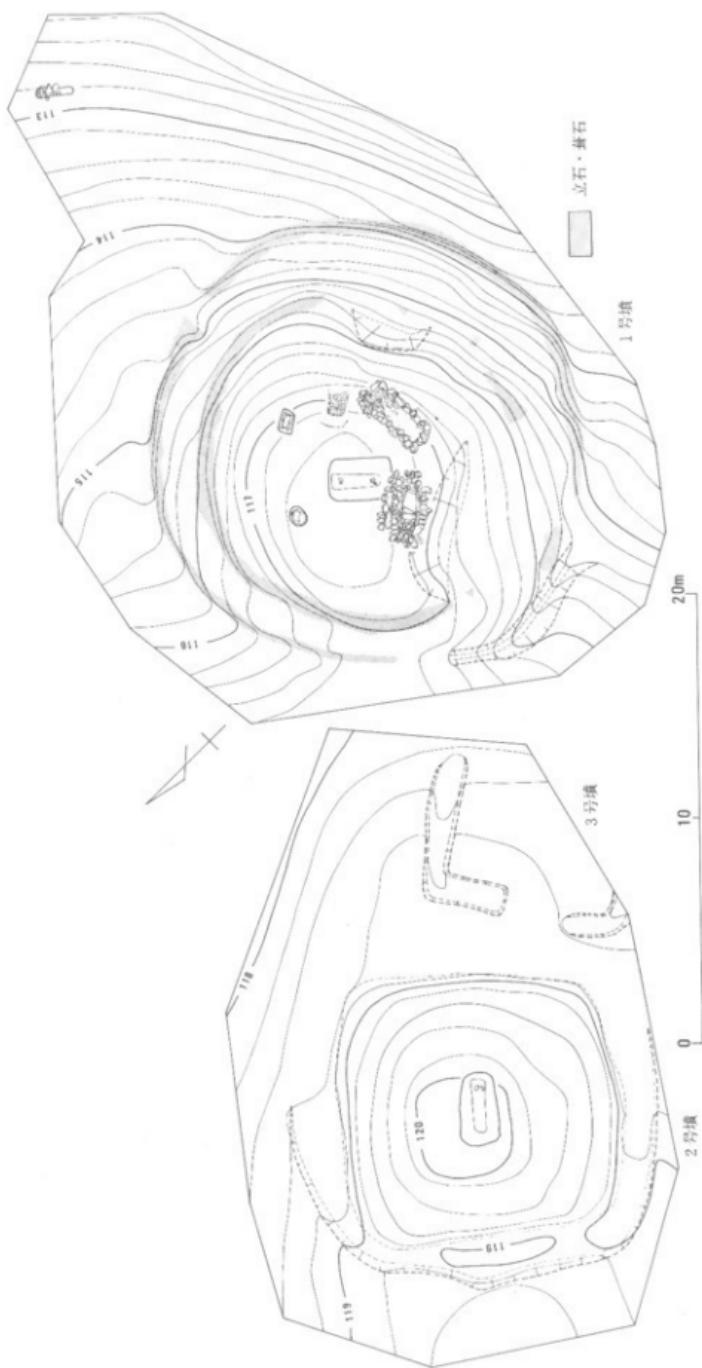
発掘調査主体 津山市教育委員会 教育長 秋原賢二(H3.6.25)・森定貞雄(H3.7.12-)、教育次長 村上光、文化課長 口下泰洋(H3.5.31)・森元弘之(H3.6.1-)、文化係長 植山三千穂(H3.5.31)、文化財センター 所長 須江尚志(H3.6.1-)、次長 中山俊紀(H3.6.1-)、主事 行田裕美(調査担当)、同 小郷利幸(調査担当)、発掘作業員 神田悦男、鳥越 武、中尾登美子、中尾政子、中村量一、西尾ときゑ、久常利男、久常照了、広野 学、三好正子、山本さつよ、横部 明、横部和巳、吉田静子

尚、発掘調査から報告書作成に至るまで下記の方々の指導、助言、協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。(敬称略)今井 駿、氏平昭則、大谷晃二、樋岡辰男、小谷善守、佐久山史子、高橋進一、田中清美、谷重豊季、寺沢 薫、根鈴輝雄、松岡浩太郎、福田正継、安井 哲

第2圖 近長丸山古墳群測定測量圖 ( $S = 1 : 250$ )



第3圖 近長丸山古墳群墳丘測量図 ( $S = 1 : 250$ )

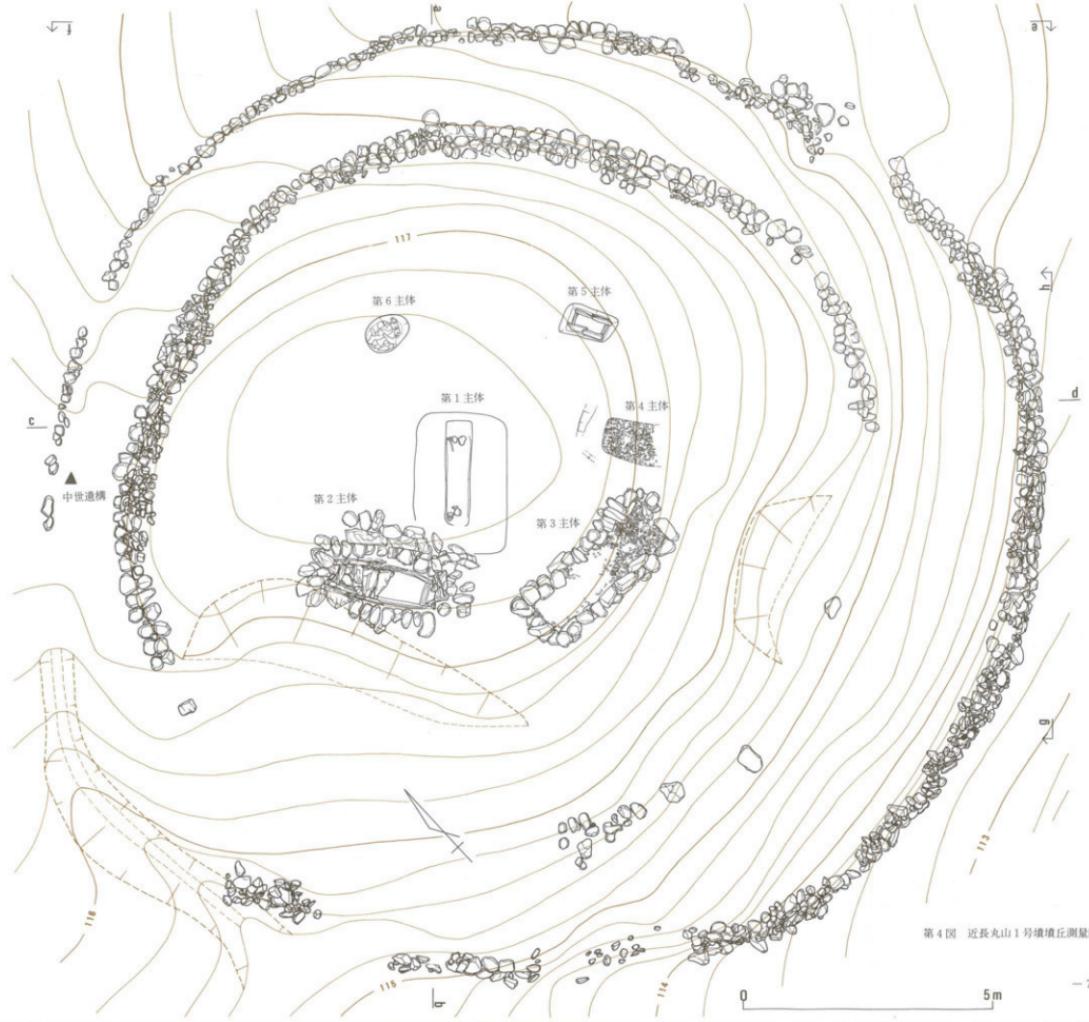


### III 調査の記録

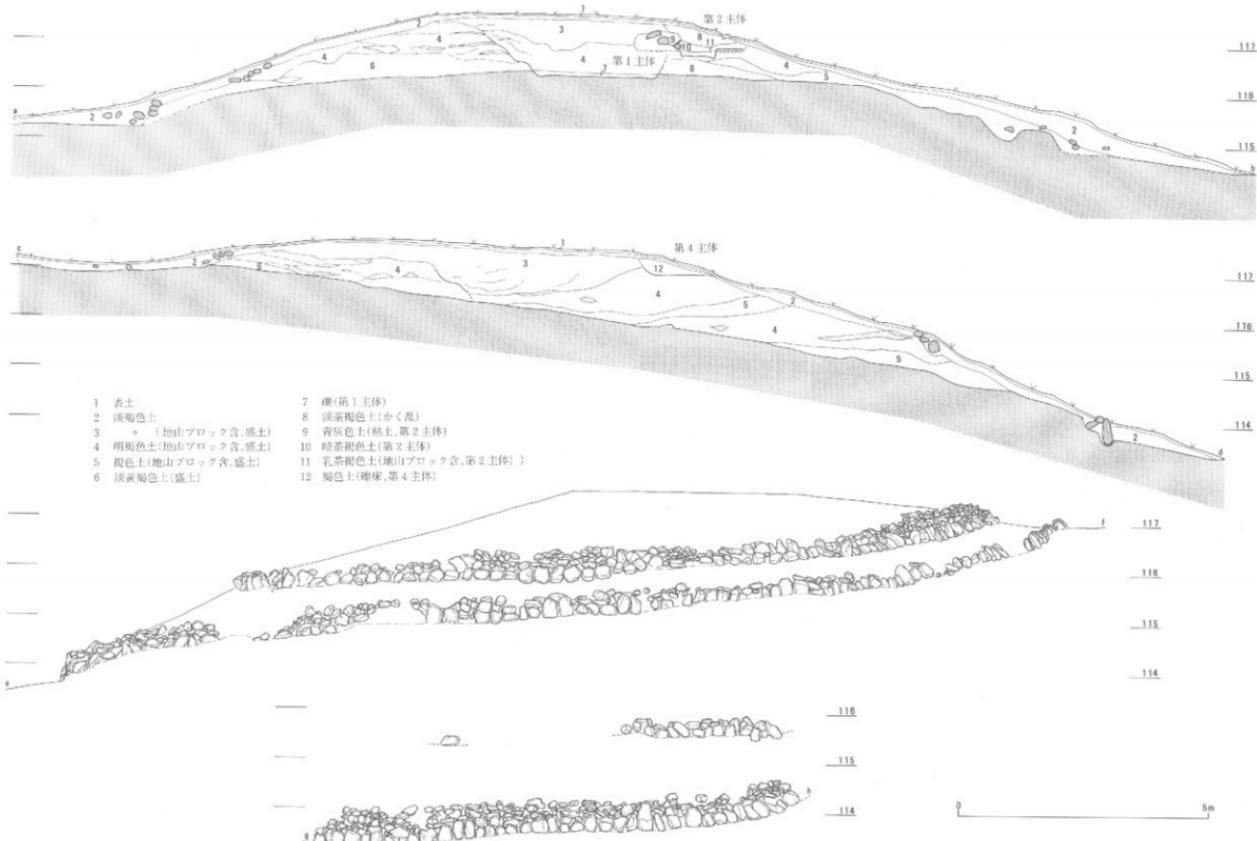
#### 1 近長丸山1号墳

近長丸山2・3号墳と同一丘陵の頂部からやや下った斜面に立地する。調査前では、山側の周溝の存在や斜面に立地する事から盛土の存在、さらに河原石が散見される事から葺石の存在などが推測された。なお南西側斜面は畑作のための土取りが行われており、一部で河原石がかなり散乱していた。

本墳は2重に立石・葺石が巡る円墳で、直径19.8~20m、高さは山側0.7m、谷側3.9mを測る。山側の周溝は明瞭でなく、高い部分をある程度広い範囲に浅くカット整形するだけの簡単なものである。2重に巡る立石・葺石は最下段とそこから1m程上部を鉢巻き状に巡っている。しかし山側と谷側ではかなりの比高差があるためこの2重の立石間の間隔も谷側と山側では大きく異なり山側では両者のレベルがほぼ近接している。下段の立石・葺石は西側の一部を除きほぼ全周する。この内東側に幅1m程で一部途切れている箇所があり、ここには全く石が存在しない。また抜き取られた痕跡も無い事から、当初からここには石が並べられていなかつた可能性が大きい。ここは墓道の一部であった可能性もある。さらに西側斜面には溝状を呈する遺構もありこの部分でも同様に石が見られない。さらにこの溝が墳形に沿ってカーブしさらに境外へと続いている。この事からこの溝は本墳に伴う施設で境外へと続く事からこれも墓道であった可能性がある。立石は長さ40cm前後の細長く角の丸い河原石をほぼ隙間無く立て並べている。この様子は南東部分が残りが良く（第5図g-h）、さらに基底部のレベルを見ると谷側と山側では約3mもの高低差がある（第5図e-f）。この事から、谷側半野部をかなり意識した構築で埴丘をより大きく見せるための工夫であろう。葺石は、立石上部から幅0.8m程残存する。葺いている石は10~30cm大の河原石で葺き方はかなり粗雑で、葺くと言うよりはほぼ隙間なく重ねているようである。上段の立石・葺石の状況は南側が土取りを受けているため残りが悪いが残存する北側には下段のように途切れる部分は見られない。この立石・葺石の並べ方は基本的には下段の場合と同様である。流れた石などの状況から上段と下段の間及び上段から埴頂に向けての間すべて葺いていたとは考えられず、少なくとも両者間1m程は葺いていたものと思われる。石材は安山岩、花崗岩、片岩、玢岩などが使用されている。埴丘は大部分が盛土によって構築されている。盛土は最大で1.4mを測る。盛土は特に斜面部分が顯著で、質なった土を互層に積む事（第5図4・5・6）で水平を保つようにしている。上段の立石はこの時点で並べられているようであり、下段については谷側部分は地山成形時に振りくばめてある程度並べられていたようである。また主体部の多くはこの盛土を切って作られているが、第2主体ははっきりとした掘り方をもたず、盛土構築時に同時に作られた可能性がある。

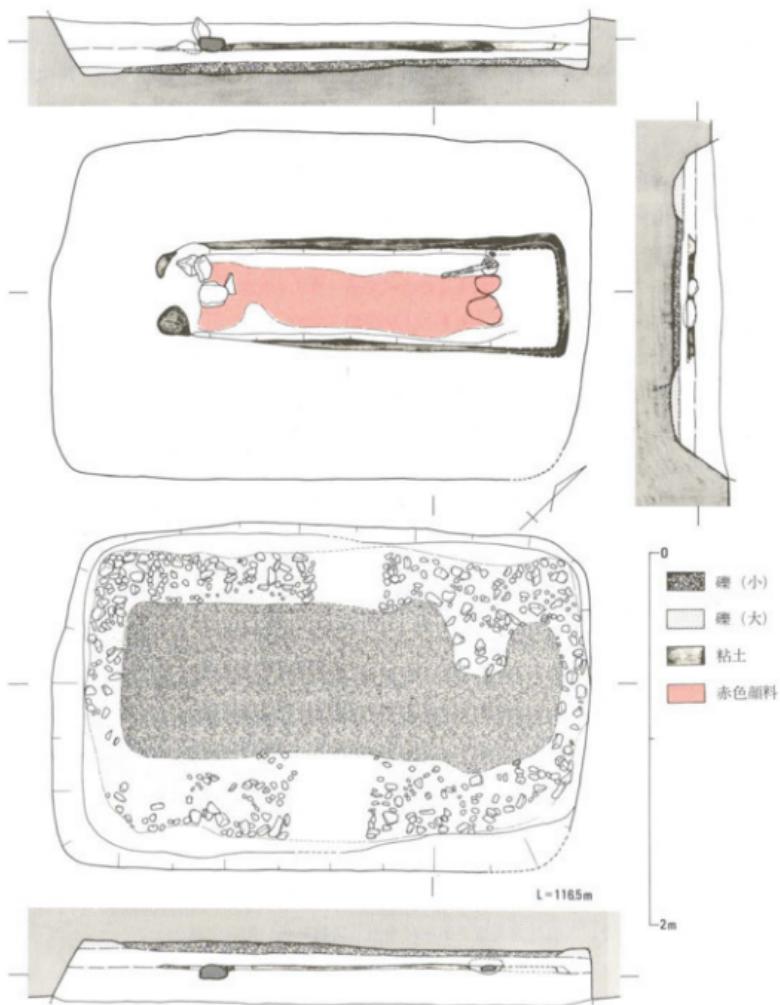


第4図 近長丸山1号墳埴丘測量図 ( $S = 1 : 80$ )



第5図 近長丸山1号滑落堆丘断面図及び立面図 (S = 1 : 80)

埋葬施設は墳丘上（上段の立石で囲まれた円内）で6基検出している。中心の第1主体を取り囲む形で5基の主体が配されている。土層の関係および深さから第1主体が一番最初に作られ、さらに第2主体はこれを切っている事からこの両者の前後関係ははっきりとしている。また第2主体が盛土の構築と同時に作られているとすると、この盛土を切って作られている他の主



第6図 第1主体平・断面図 ( $S = 1 : 30$ )

体（第3～6主体）は、第2主体より新しいと考えられる。

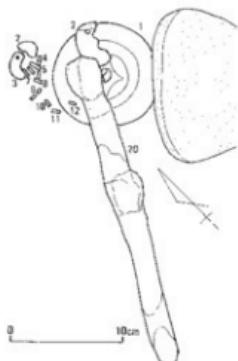
#### 第1主体（第6図）

第1主体は墳丘のほぼ中心に位置する木棺墓で、現地表面からは深さ1.1mを測りかなり深い位置にある。主体の主軸は尾根線に対し直交している。墓壙の掘り方は、長さ2.93m、幅1.85mの隅丸方形を早し、深さは最大で0.3mである。墓壙の底には排水施設とも考えられる礫が敷かれており、中心部には棺の形にそってやや小さ目の礫（親指大）が、さらにその縁辺部は一段掘りくぼめやや大きめの礫（拳大）が敷かれている。この排水施設と考えられる施設には排水溝は伴わない。この礫床を4cm程上に埋めた上に粘土床がある。粘土床は、長さ2m、幅0.6mの木棺部分を取り囲むように幅5cm程で巡っているが、南西小口では一部途切れている。粘土床の断面が緩やかな台形を呈する事から割竹形の木棺であったと考えられる。棺桶の北東側に枕石が2個ありその西側に鏡、勾玉、管玉、鉄剣がまとまって副葬されていた。副葬品はここからのみ出土している。出土遺物の状況（第7図）は、鏡は裏を向きその上に勾玉（第7・8図2）や管玉（同12）などを乗せさらにその上に鉄剣（同20）の把の部分が重なるように置いていた。その他の勾玉（同3）や管玉は鏡の西側に置かれていた。なお、鏡の上の勾玉（同2）は、一部欠損しておりこの破片は、鏡の西側の部分に存在していた（第7図左の2）。そしてこの両者がうまく接合する事などから土圧による欠損とは考えられずこの勾玉が副葬時に故意に壊された可能性もある。また管玉に関してはその出土状況から糸などに通された一連のものであった可能性もある。南西側にも石が4個出土している。これについてはその配置及び副葬品がこの部分で皆無である事などから枕石の可能性は少なく、木棺の支え石の可能性を考えている。また、床面全般に赤色顔料が塗布されていた痕跡が残り、特に北西側の枕石にそれが顕著に見られる。

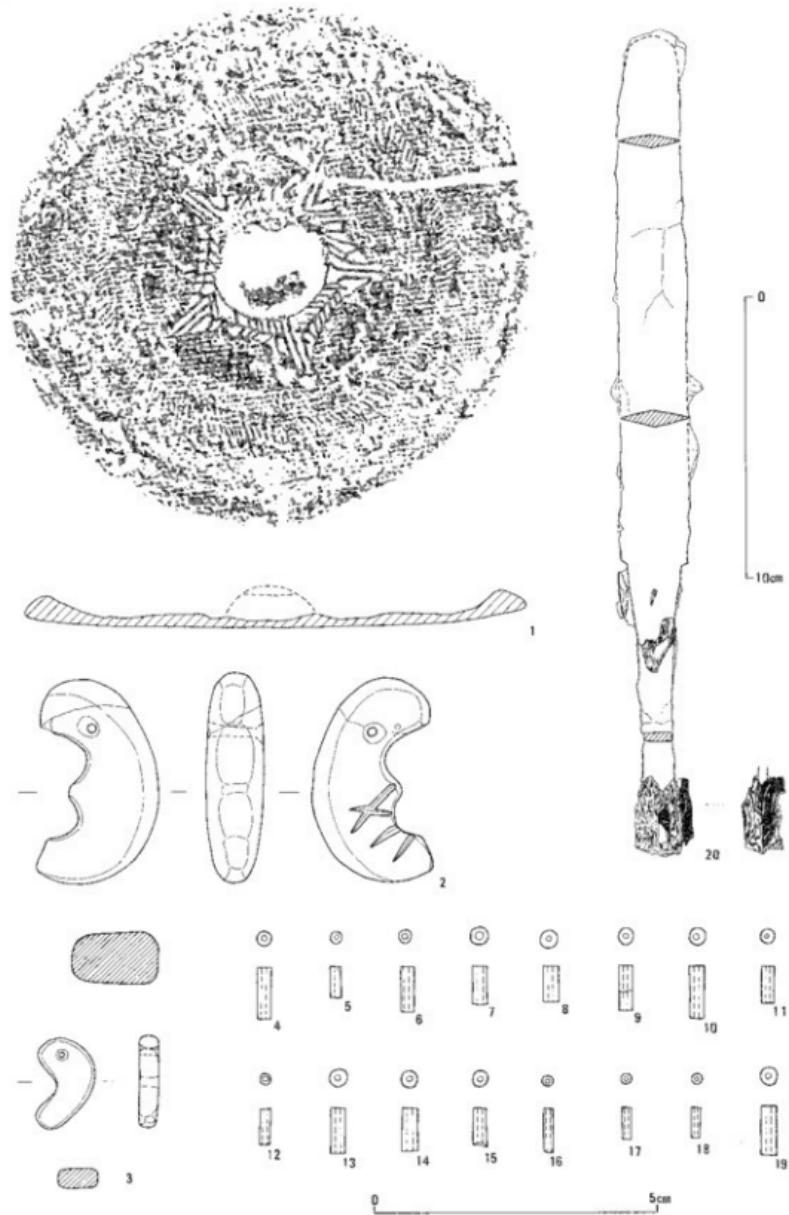
出土遺物として枕石の西側から一括して鏡1、勾玉2、管玉16、鉄剣1が出土している。

鏡（第8図1） 鏡は仿製内行花文鏡である。直径9cm、縁端部厚0.4cmを測り、全体の3分の1程の所にひびがはいって割れている。このひびは故意のものか土圧による自然の割れ日かは不明である。全体に鋳上がりは良いが、縁端部は鋸によるブロンズ病がすんで剥落している。また鏡も欠損しておりその形状は不明である。内区の花文は五花文であり、この花文と紐の間は鋸からの直線で5つに区切られ、その中に綾衫文（△→△）が配されている。内区外周は斜行柳葉文帶で、外区は素文帶で断面はやや三角縁に近い形状である。

勾玉（第8図2・3） 2は通常のC字形ではなく、中心が膨らんだE字形を呈する。全長3.7cm、中心部の厚さ0.9cmを測り、孔部分で2つに割れており、孔は両側から穿孔されている。



第7図 第1主体遺物出土状況  
(S=1:5)



第8図 第1主体出土遺物 (1~19··S = 1 : 1, 20··S = 1 : 2)

中心から下部にかけての片面に線刻がみられ現状では四本観察できる。上側二本は×に、下側二本は平行している。3は全長1.6cm、厚さ3mm程の比較的薄いもので、孔の穿孔は両側からである。いずれも材質はヒスイである。詳細は第1表を参照されたい。

管玉（第8図4～19） 全部で16個出土している。全長は5.7～9.5mm、径は1.9～3.3mmの範囲に収まり、中心に1mm程の穿孔がなされている。材質はすべて碧玉である。詳細は第1表を参照されたい。

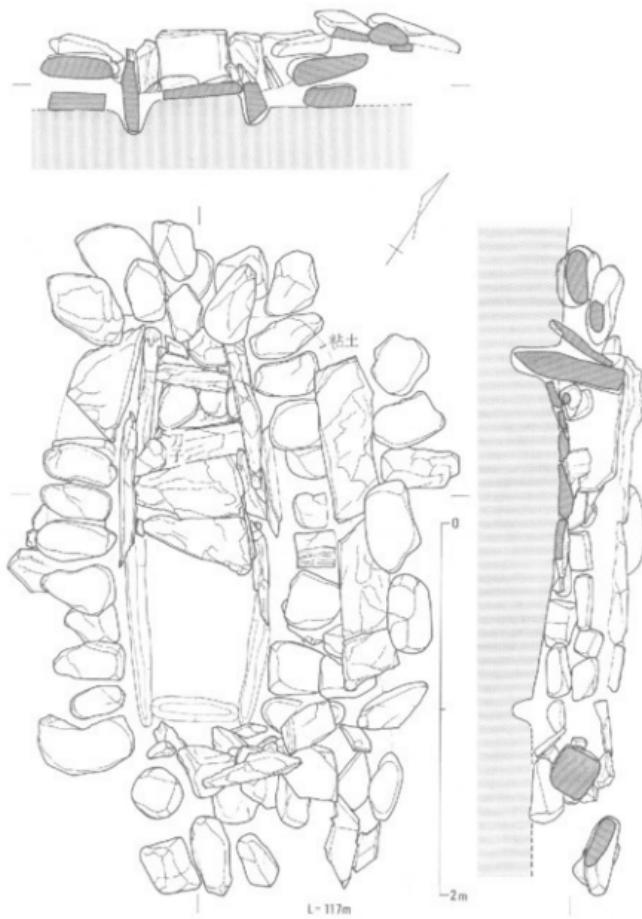
鉄劍（第8図20） 全長29.7cm、刃部幅2.5cm、厚さ6mmを測る。切っ先はやや丸くなり、茎には木質が残存する。特に把頭には木質の上に墨漆を塗りさらにそれに線刻を施している。その線刻の部分は赤色に塗られており模様を構成している。部分的にしか残存しないため全体の模様構成は不明であるが平行する曲線が3～4条観察される。

#### 第2主体（第9図）

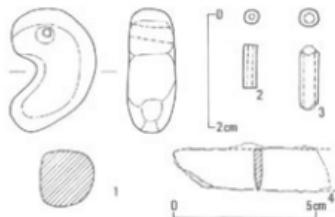
第1主体の西に近接して位置し、盛土の上部につくられているが明確な掘り方はもない。また第1主体の掘り方の一部を切っている。主体の主軸は尾根線に平行である。主体は箱式石棺の周りを堅穴式石櫛風に石を積み囲ったもので、堅穴式石櫛・箱式石棺とでも呼べるものである。なお全般に削平・攪乱を受けており蓋石及び箱式石棺南側の小口・側石は抜き取られている。この堅穴式石櫛は全長3.6m、幅2.4mの範圍に、河原石を積んだもので、積み方はやや乱雑で、40cm程の丸石を2段に積み上げている。さらに東側ではこの上に、長さ0.9m、幅0.3m程の平らな石を主軸に沿って並べている。蓋の詳細な構造については明確でないが、これら平らな長い石を並べて蓋にしていた可能性もあり、この痕跡は南小口部分で観察できる。なお、石の隙間は粘土によって目張されている。箱式石棺は南側半分がすでに石が抜き取られているが、内法で全長1.7m、幅は北小口0.43m、南小口0.47m、中心で0.6mを測り、引

勾玉										(mm)	
No.	全長	幅	厚さ	孔径	穿孔方向	材質	色調				
2	37.1	15.3	9.3	4.1	両 方	ヒスイ	淡緑色				
3	16.5	7.1	3.4	2.1	両 方	"	"				
管玉										(mm)	
No.	全長	径	孔径	材質	色調	12	6.8	2.1	1.1	"	"
4	9.2	2.9	1.0	碧玉	暗緑色	13	8.5	2.9	1.0	"	"
5	6.0	2.2	0.9	"	"	14	8.0	3.1	1.0	"	"
6	8.2	2.4	1.0	"	"	15	7.0	2.8	1.0	"	"
7	7.0	2.9	1.1	"	"	16	8.1	2.2	1.0	"	"
8	6.5	3.3	1.0	"	"	17	5.9	1.9	0.9	"	"
9	8.1	2.8	0.9	"	"	18	5.7	1.9	0.9	"	"
10	9.5	2.9	1.1	"	"	19	9.0	2.9	1.1	"	"

第1表 第1主体出土玉類一覽表



第9図 第2主体平・断面図 ( $S = 1 : 30$ )

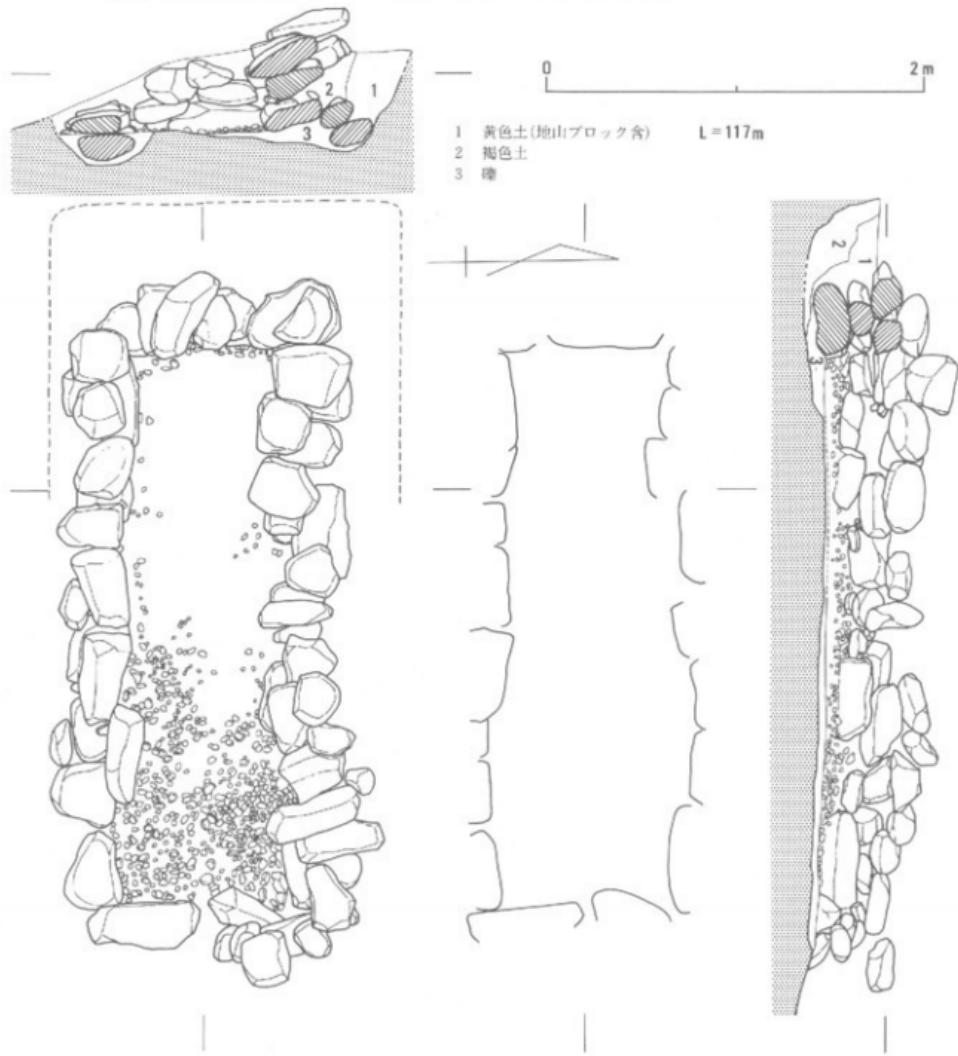


第10図 第2主体出土遺物  
(1~3… $S = 1 : 1$ 、4… $S = 1 : 2$ )

勾玉						(mm)	
No	全長	幅	厚さ	孔径	穿孔方向	材質	色調
1	22.1	10.2	9.5	3.4	両方	ヒスイ	濃緑
菅玉						(mm)	
No	全長	径	孔径	材質	色調		
2	7.9	2.8	1.0	碧玉	暗緑色		
3	11.3	3.7	2.0	緑色凝灰岩	乳緑色		

第2表 第2主体出土玉類一覧表

心がやや膨らんだ形状を呈する。北小口には枕石が2個あり、床面には平らな石がほぼ隙間無く敷き詰められている。これも南側がすでに抜き取られている。枕石付近の小口石及び側石の内面には赤色顔料が塗布されていた痕跡が残る。この枕石の西側で刀子が1個、さらに搅乱埋



第11図 第3主体平・断面図 ( $S = 1:30$ )

土内から勾玉1、管玉2が出土している。

勾玉（第10図1） 全長2.2cm、厚さ0.9cmを測る。孔の穿孔は両側から行われ、材質はヒスイである。詳細は第2表を参照されたい。

管玉（同2・3） 2は全長0.8cm、径0.3cmで中心に1mm程の穿孔がある。材質は碧玉である。3は表面が摩滅している。全長1.1cm、径4mmを測り、2mm程のやや大きめの穿孔がなされている。両端が一部欠損している。材質は他と異なり緑色凝灰岩の可能性がある。詳細は第2表を参照されたい。

刀子（同4） 刃部が半分程残存する。残存長5.6cm、幅1.5cm、厚さ3mmを測る。

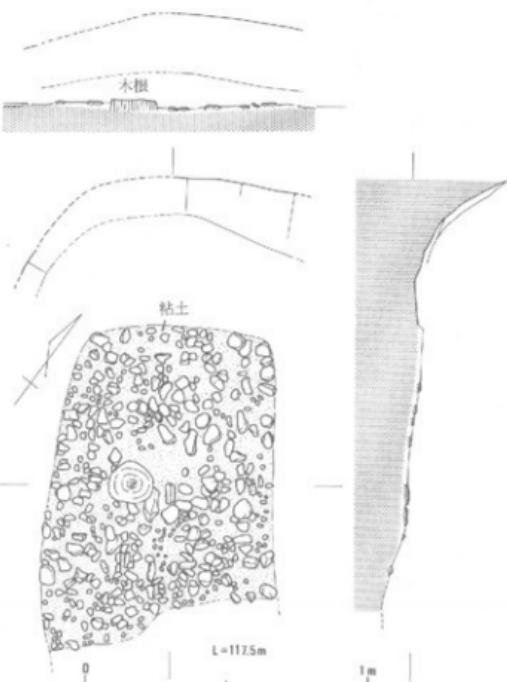
### 第3主体（第11図）

第1主体の南に主軸を尾根線に対しやや斜交させて位置する。河原石を積み上げた堅穴式石櫓である。主軸はほぼ東西方向を向く。これも削平を受け蓋石の存在は不明であるが攪乱埋土内から平らな長石が出土している事から、これが蓋石であった可能性がある。石櫓は全長3.8m、幅1.8m、内法で全長2.95m、幅は東小口0.9m、西小口0.85m、高さは最大0.7mを測る。石の積み方は、粗雑で現状では3段まで積んでいる事が確認でき、この面で同一レベルがほぼ保たれている。

この事からこの上に蓋石が乗っていたのかもしれない。床面には玉砂利（親指大）がほぼ全面に敷かれていた。なお、床面の断面は緩やかなU字形を呈する事から、中に収められていた木棺の形状を推測する事もできる。出土遺物は床面の精査を行ったにもかかわらず皆無である。

### 第4主体（第12図）

第3主体の北東に位置し主軸は尾根線に平行である。盛土内上部から掘り込まれており、南東半分はすでに流失している。現状では床面の礫床



第12図 第4主体平・断面図 (S = 1:20)

のみを検出している。おそらく木棺がこの上に埋葬されていたと考えられる。現状で掘り方残長1.7m、幅1m、礫床残長1.16m、幅0.81mを測る。礫床の石は6cm程の丸石で隙間に粘土を充填している。出土遺物は皆無であるが北西掘り方近くの盛土内から鉄器（第16図1）が出土しており、その位置から考えてこの主体に伴う可能性もある。

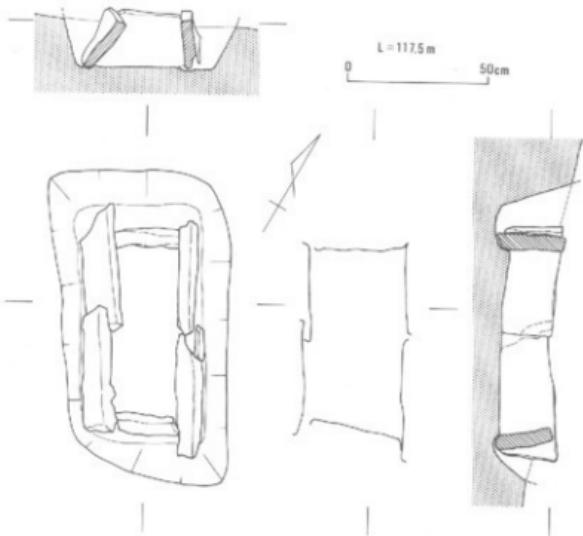
#### 第5主体（第13図）

第4主体の北東に位置する小型の箱式石棺である。表土除去時にすでに側石が露出していた。主軸は尾根線に対しやや斜交する。掘り方全長1.1m、幅は北小口0.6m、南小口0.5m、内法全長0.63m、幅は北小口0.35m、南小口0.36m、高さ19cmを測る。蓋石は存在せず木蓋であった可能性が高い。側石は2枚、小口石は1枚でそれぞれ構成され、床面には何ら施設は伴わない。また出土遺物も皆無である。

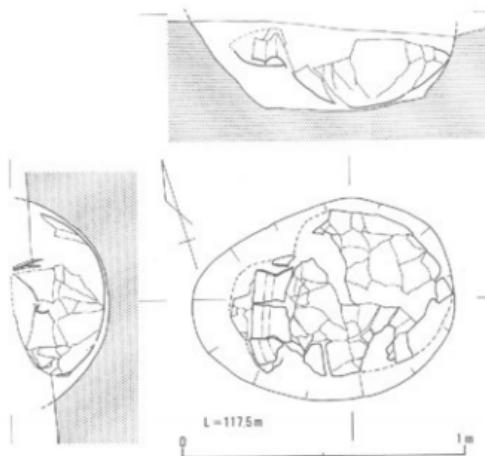
#### 第6主体（第14図）

第1主体の北に位置する土器棺である。表土除去時にすでにその一部が露出していた。主軸はほぼ東西方向である。盛土に掘り込まれており掘り方は長径95cm、短径70cm、深さ33cmの梢円形を呈する。中に長さ68cm程の壺を横にして埋葬し、平底の底部で蓋をしている。土器棺の内部からは高杯の破片（第15図3）と14cm程の棒状の石が出土した以外は副葬品等は皆無である。

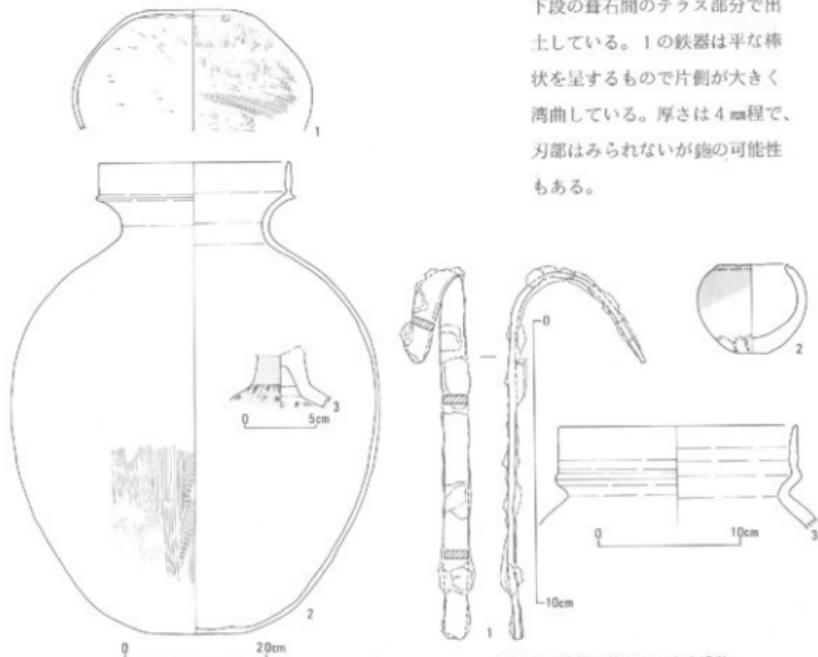
**土器棺（第15図1・2）** 1は平底の底部のみを蓋として使用している。底部は底径12cmとかなり大きく、胴部に向かって内彎しているので鉢形に近い器形の底部と考えられる。2はかなり大きめの二重口縁の壺で全長68cmを測る。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり端部端面はやや平に仕上げている。胴は卵形を呈し底部はやや平底を残している。全面はかなり摩滅しているが胴部下半の外面にタテハケの痕跡が観察される。



第13図 第5主体平・断面図 (S = 1 : 20)



第14図 第6主体平・断面図 ( $S = 1 : 20$ )



第15図 第6主体出土遺物  
(1・2… $S = 1 : 8$ , 3… $S = 1 : 4$ )

高杯 (同3) 短脚の高杯の脚部である。外面は赤色に塗られている。

#### 遺構に伴わない遺物 (第16図)

埴丘の表土除去時に小形の土器 (第16図2) や土師器 (第16図3) が、盛土内から鉄器 (第16図1) が出土している。2は小形の土器で平底である。北側下段の立石の基底部付近で出土している。外面上半分は赤色に塗られ下半分には黒斑がついている。3は二重口縁の甕の口縁部である。北西側の上段と下段の葺石間のテラス部分で出土している。1の鉄器は平な棒状を呈するもので片側が大きく湾曲している。厚さは4mm程度で、刃部はみられないが鍔の可能性もある。

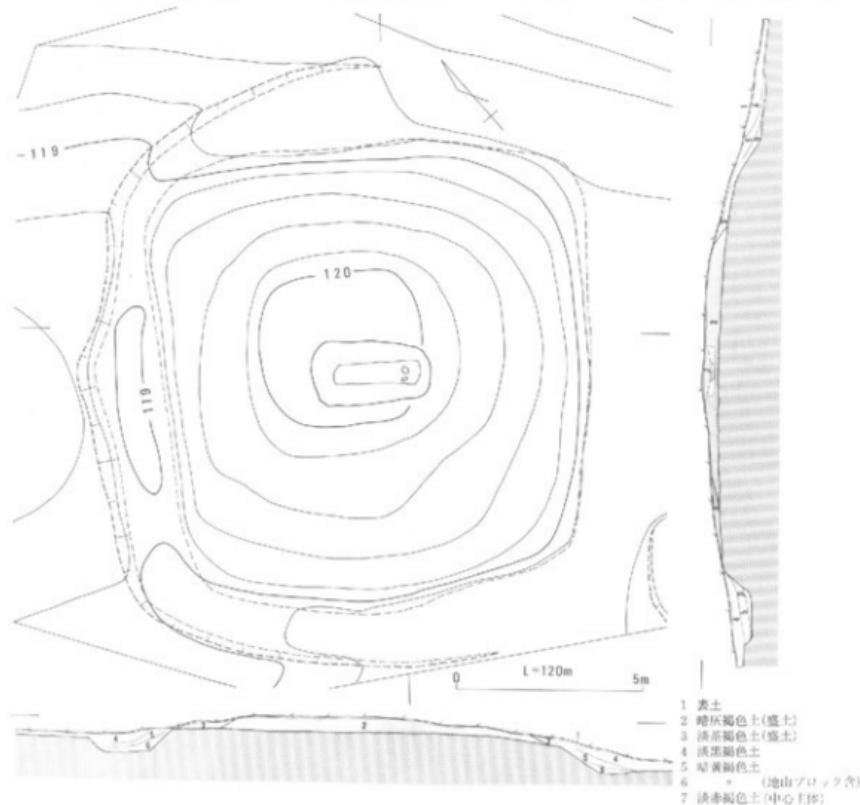
第16図 遺構に伴わない出土遺物  
(1… $S = 1 : 2$ , 2・3… $S = 1 : 4$ )

## 2 近長丸山 2号墳（第17図）

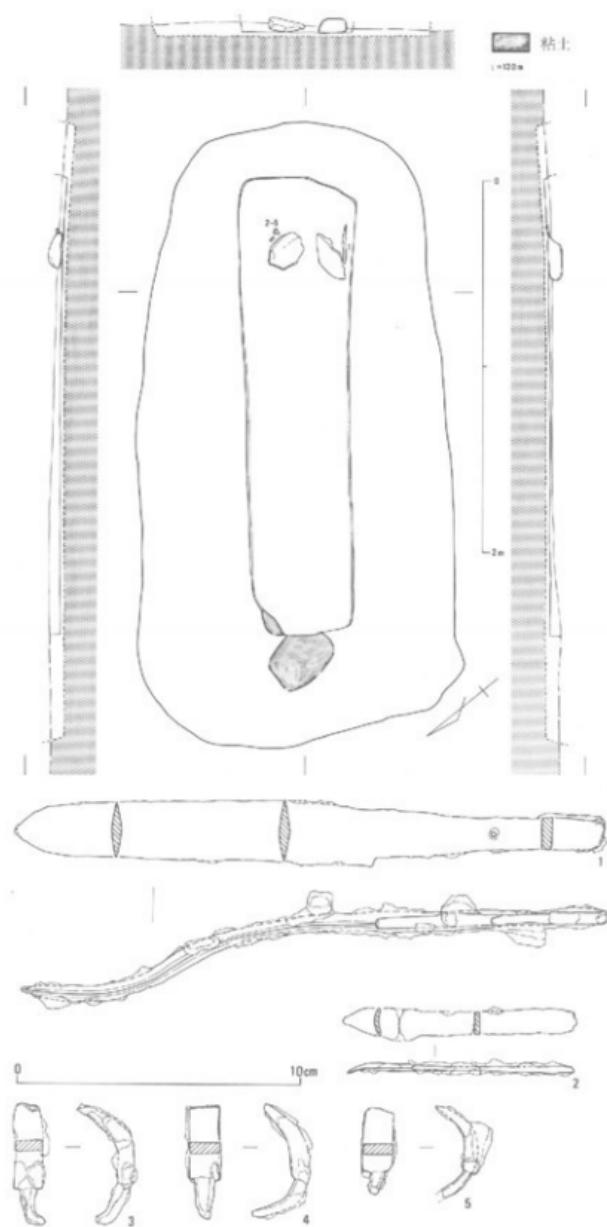
丘陵の頂部に立地する南北12.4m、東西12mの方墳である。調査前の状況は、山側に方ないし円形状に巡る周溝の痕跡が見られた。また、墳丘内には目立った搅乱の痕跡は見られなかつた。

周溝は北西山側にコの字形に巡り谷側では自然解消している。周溝は幅1.4～2.5m、深さ0.7mを測り、断面は角ばったU字形を呈する。埋土は3層で2層目（第17図5）から土器片や人頭大の河原石が出土している。特にそれは南側周溝内が顕著であるが、何ら遺構に伴うものではない。ただこの石の周辺で土器片がある程度まとまって出土している。この事から周溝がある程度埋まった状況時にこれら石及び土器が置かれたと考えられる。また葺石などの外部施設は伴わない。墳丘の高さは山側で1.06m、谷側で1.48mを測る。

墳丘は山側は周溝によって、谷側は削り出しによって整形されており若干の盛土が残存する。



第17図 近長丸山 2号墳平・断面図 (S = 1 : 150)



第18図 中心主体平・断面図 ( $S = 1 : 30$ ) 及び出土遺物 ( $S = 1 : 2$ )

盛土は約0.4m程残り2層から成る。まず墳丘の中心大部分を先に構築し(第17図2)、それから周辺部を整形する形(第17図3)で築成している。また、墳丘はある程度削平を受けているものと思われる。

#### 埋葬施設(第18図)

墳丘の中心に1基存在し木棺墓である。主軸は丘陵の尾根線に平行している。掘方は全長3.37m、幅は南東側1.36m、北西側1.73mを測る環丸方形状を呈し、中心に木棺の痕跡部分が全長2.47m、南東小口幅0.62m、北西小口幅0.52m、深さ3cmの長方形状に存在し、南東小口側に枕石が2個残存する。この枕石はほぼ平らな自然石をハの字形に配している。石材は玢岩である。北西小口側の一部で砂質に近い粘土が残りこの事からこれらは木棺据え付けの際の補強に使用していたものと考えられる。副葬品としては南側の枕元に鉄劍1点が、北側の枕元に鉄鎌3点、鍔1点がある。床面に一部赤色顔料が塗布されている。

**鉄劍(第18図1)** 土圧か故意によるものか不明だが刃部は湾曲している。劍であるが闇は片方にしかない。復元全長21.2cm、刃部幅2.1cm、厚さ4mmを測り、茎部に目釘穴が1個存在する。

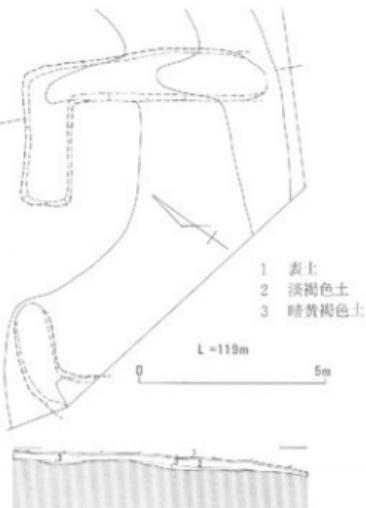
**鉄鎌(同2)** 全長8.2cm、幅9mm、厚さ2mmである。

**鉄鎌(同3~5)** 盤頭式の鉄鎌と考えられいずれも湾曲している。刃部は全長2.5~3cm、幅1cm、厚さ4mm程で片刃である。茎は角ばった球形である。

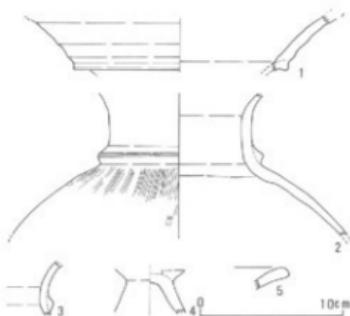
**遺構に伴わない遺物(第20図1~3~5)** いずれも細片からの復元である。1は周溝内から出土した土師器の二重口縁の壺の口縁部と考えられ緩やかに外反している。3は壺の頸部で断面三角形の張り付け突帯が巡っている。5は口縁端部で先は丸くおさめている。5と1は同一個体の可能性もある。

#### 3 近長丸山3号墳(第19図)

調査前では、墳墓の可能性が全く見られなかったが、確認調査時に周溝の一部を検出してい



第19図 近長丸山3号墳平・断面図(S=1:150)



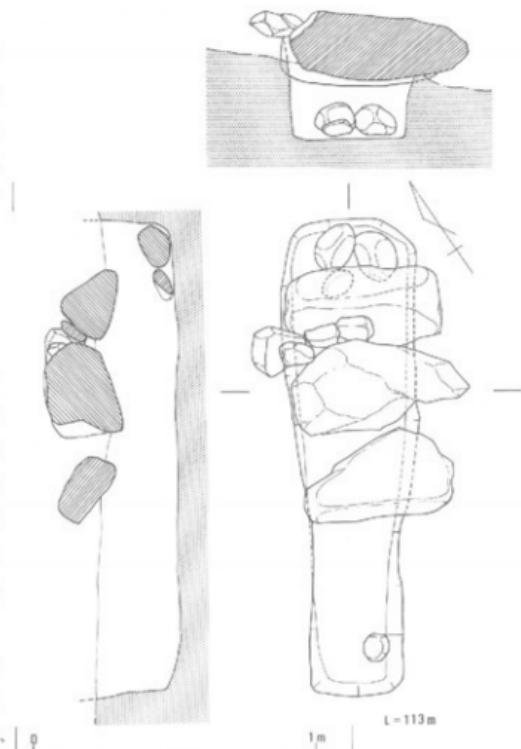
第20図 2・3号墳出土遺物(S=1:150)

た。1・2号墳の間で検出された古墳で大部分が削平を受け周溝の痕跡のみが残存する。周溝もコの字形の中心が途切れた非常に浅いL字形を呈し、特に南西側の大部分は土取りのため大きく削られている。残存する周溝から一辺約7.8m程の方墳と考えられる。周溝は残存部分で幅1.3m、深さ0.3mを測り、埋土から土器片が少量出土している。墳丘の構築が削り出しで盛土によるものかは盛土が全く残存しないため不明であるが、2号墳同様山側には周溝が巡り谷側は削り出しによって構築され盛土が行われていた可能性が強い。高さも現状で0.3mを測る程である。

埋葬施設も削平のため不明である。出土土器（第20図2・4）の内2は壺の破片で頸部と胸部との境に断面三角形の突帯が巡り頸部はほぼ垂直に立ち上がり口縁部は外反している。2号墳の口縁部（第20図1）が付き二重口縁の壺になる可能性もある。外面にはハケの痕跡が残る。4は摩滅が著しい。高杯ないしは小型の器台の脚部である。

#### 4 その他の遺構・遺物

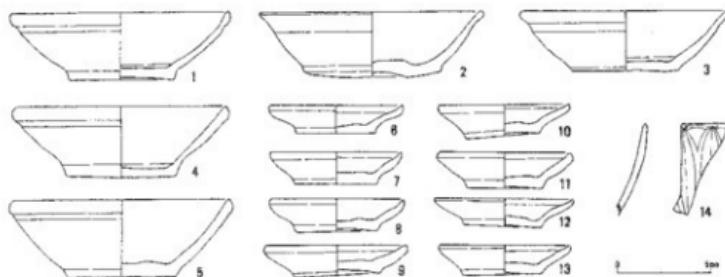
近長丸山1号墳の東10mに単独して石蓋土壙墓が1基存在する（第21図）。周辺表土を重機で除去時に蓋石が発見された。現状では蓋石は北側の3個のみが残存するが、少なくともさらに南側に3個、北側に1個は存在していたものと考えられる。蓋石は長さ0.6m程の自然石で石と石との隙間は小さな石で充填している。土壤の掘り方は全長1.7m、北側幅0.45m、南側幅0.33mの隅丸長方形で、深さ0.3mを測る。北西床面には枕石が2個ハの字形に配されている。内部からの出土遺物は皆無である。近長丸山1号墳とは距離的にかなり離れており、さらに単独で存在し出土遺物も皆無である事から、



第21図 石蓋土壙墓平・断面図 (S=1:20)

本墳に伴うものかどうかは不明である。

また中世遺構が近長丸山1号墳の埴丘内、北西側の上段立石の中間にある（第4図▲）。遺構の詳細については明確でないが、土師質の小皿・碗・杯と青磁片が出土しており埋納遺構と考えられる。土器の詳細については第22図及び観察表（第3表）を参照されたい。



第22図 中世遺物 ( $S = 1 : 3$ )

番号	種別	器種	法量 (cm)			形態・手法の特色	色調	胎土	残存率	備考
			口径	底径	器高					
1	上部質土器	碗	12.0	5.6	3.6	内外面ヨコナデ・外面口縁部直下、見込み体部境に浅い凹線・体部や内湾・底部糸切り	赤褐色	細砂含	2 / 3	
2	土師質土器	杯	12.2	7.4	3.5	外面ヨコナデ・口縁部ヨコナデや外反・底部やや突出・底部ハラ切り	淡黄褐色	細砂含	光存	この一点のみ他の物と胎土、色調、成形法が異なる
3	土師質土器	碗	11.4	5.7	3.2	内外面ヨコナデ・外面口縁部直下、見込み体部境に浅い凹線・体部や内湾・底部糸切り	赤褐色	細砂含	2 / 3	
4	上部質土器	碗	11.6	5.9	3.8	同上	赤褐色	細砂含	1 / 2	
5	上部質土器	碗	12.0	5.7	4.2	同上	赤褐色	細砂含	1 / 2	
6	土師質土器	小皿	7.2	4.2	1.5	内外面ヨコナデ・口縁部はシ・ブ・見込み・体部境に浅い凹線・底部糸切り	赤褐色	細砂含	1 / 2	
7	土師質土器	小皿	7.2	4.4	1.7	同上	明～赤褐色	細砂含	2 / 3	
8	土師質土器	小皿	7.4	4.6	1.8	同上	明褐色	細砂含	2 / 3	
9	上部質土器	小皿	7.6	4.5	1.7	同上	褐色	細砂含	3 / 4	
10	上部質土器	小皿	7.2	4.0	1.8	同上	赤褐色	細砂含	光存	
11	上部質土器	小皿	7.4	4.0	1.9	同上	赤褐色	細砂含	3 / 4	
12	土師質土器	小皿	7.4	4.0	1.5	同上	赤褐色	細砂含	光存	
13	土師質土器	小皿	7.2	4.2	1.6	同上	赤褐色	細砂含	3 / 4	
14	青磁	碗	-	-	-	やや細身の斜め弁文を有する・器壁厚約4mm	胎土灰白色 器底淡緑色	織密 11枚片		龍泉窯系

第3表 中世土器一覧表

## IV ま と め

近長丸山古墳群は3基の古墳からなる。このうち1号墳と2・3号墳とは明らかに墳形・規模・副葬品などの面で大きく異なっている。この事から大きく2群に分けられよう。これらが時間的な推移の中で捉えられるものか、また政治的ランク付けの中で捉えられるものは即断は許されないが、ここではこの両者について周辺地域と比較検討しながら考察してみたい。

### 1 近長丸山1号墳について

1号墳は直径約20mの円墳で2重に立石・葺石が巡っている。埋葬施設は、墳丘の中心に木棺がありそれを取り囲む形で5基の土体が配されている。埋葬施設には割竹形木棺・堅穴式石櫛・箱式石棺・土器棺など当時の主たるもののが使用されている。また、中心土体からは鏡、玉類、鉄劍がセットで出土しており他の埋葬施設とは卓越している。以下このような本墳の特性について比較検討していくことにする。

**立石・葺石について** 二重に石巡らす円墳としては、県内では哲西町・光坊寺1号墳(註1)、倉敷市・西栗坂1号墳(註2)、県外では広島県三次市・下山手第4号古墳(註3)、同福山市・石鎚山第1号古墳(註4)などがある。この中で本墳同様はっきりと石を立て並べているのは、光坊寺1号墳、石鎚山第1号古墳ぐらいである。その中で前者は高低差を利用した立石の構築方法をとり本墳と非常に良く似ている。またこれら古墳はいずれも直径20m以下で、ほとんどが4~5世紀代の前半期古墳とされ、墳形・規模など外部の特徴から言えば本墳もこれら古墳とはほぼ同時期の所産と考えて差し支えなかろう。ただ石の立て方、使用石材など詳細に見れば地域によって様相は異なっている。本墳のように石を調達しやすい川などが周辺にある場合以外は石の確保はかなり困難であろう。また立地の面から言えば、このような立石が巡る一つの要因は、本墳のように斜面に整造するため墳形をより明瞭にするための一手段と考えれば、この場合立石の有無は、古墳の立地場所選定の段階である程度制約が関わってきている可能性も十分あり、そこに画一的な政治的ランク付けの力関係が関わってきているのかもしれない。

**埋葬施設について** 本墳のバラエティーに富む埋葬施設に関しても若干述べてみたい。中心の第1土体の木棺は棺自体はそれほど長大でなく、2号墳の中心土体とほぼ同規模である。しかし両者の違いは懸念である。それは粘土床・割竹形木棺で鏡、玉類が副葬されている点である。このように両者にはかなりの差異が認められ第1土体・木棺が2号墳中心土体に比べかなり卓越化している事が何える。また全体的な様相が似ている光坊寺1号墳の中心土体(第V土体)の木棺は割竹形ではないが、片側だけの簡単な排水施設を備えている。第1土体のような全方向的な排水施設は、石鎚山第1号古墳・第1号土体にあるがこの埋葬施設は堅穴式石櫛でさらに排水溝を伴う点で本墳とは構造面で大きく異なっている。本墳及び光坊寺1号墳の排水施設は排水溝を伴わないなど簡略化した施設とも考えられよう。第2土体の堅穴式石櫛風・箱式石棺

については現在県内では類例は知られていない。ただ箱式石棺の外部に持え積みを行う例（註5）は知られており、この事から広義の意味での箱式石棺の亜種として捉えておきたい。第3主体の堅穴式石棺に関しては、規模から言えばいわゆる短小型（註6）であり長大な前期古墳のそれとは大きく異なる。また内法の長さを幅で割った長幅比で比較してみると3.2であり、ほぼ同規模なのに石鎚山第1号古墳・第1号主体（長幅比2.8）などがある。その他の類例は県南の弥生墳丘墓の主体部に見られ（註7）、この事からより古い様相を踏襲したものと言えるかもしれない。ちなみに津山地方ではこのような規模の堅穴式石棺の初現については定かでないが、須恵器を伴う6世紀前半頃の円墳にまで使用されている（註8）。第6主体の土器棺は普通古墳の中心的な主体ではあまり見られない。通常子供それも乳幼児の埋葬に使用されたとされるが内部からは骨等は発見されていない。墳丘内に埋葬されている事から中心被葬者により近い乳幼児の棺であろう。これら埋葬施設を全般的にみるといわゆる古墳的様相を取り入れながらも前時代の墳墓祭祠を色濃く残しているように思える。また埋葬施設の種類（例えば木か石か）の違いは、被葬者の出自の違いを反映しているとする見解がある（註9）。本墳の場合中心主体は木をその他の多くは石を使っている。石を使った施設の石の使い方には格差はあるもののこの中に出自の違う者が含まれている可能性もあり、特に第2主体の箱式石棺の亜種については、今後の類例の比較検討が望まれる。

**出土遺物について** 出土遺物の中で特徴的な物に関する若干述べたい。まず仿製の内行花文鏡であるが、このような小型のものは現在県内で15例程知られている。その中ではもちろん全国的に見ても今回出土のよう模様（花文と鋏の間に綾杉文を施す）は知られていない。津山市周辺では、鏡野町・竹田9号墳（註10）、同・土居妙見山古墳（註11）などで仿製内行花文鏡は出土しているがいずれも大きさや花文数が異なり、墳形をみても15m前後の方墳、25m以下の前方後円墳で異なる。しかし墳形は異なるが規模そのものは20m前後であり同一クラスの範疇に含まれるものかもしれない。また五花文の鏡は岡山市・百間川原尾島遺跡（註12）、山陽町・さくら山方形台状墓（註13）でも発見されており弥生時代に類例がある。なお古墳出土の仿製内行花文鏡を再吟味した森浩一氏の分類によるとA1式であり、氏はこれら内行花文鏡は弥生時代の小型斜行備歯文帶鏡が起源で、前時代の技術でこれら小型内行花文鏡を作製したとしている（註14）。また、これとは別に小型仿製内行花文鏡の原型は中国製の小型内行花文鏡にあるとする見解もある（註15）。さらにこれら小型仿製鏡の同范鏡が少なく形式が多い事は、このような鏡が一定地域で集中的に作られたのではなく、ある程度地域ごとに作られ政治的配布がなされたためと解釈できよう。次にヒスイ製の勾玉の中で一般に獸形勾玉と呼ばれるのが1点出土している（第8図2）。この種の勾玉は現在全国で13例程知られており、本墳と形態が似ているものはすべて弥生時代に属するもので九州地方に多い。また、この種の勾玉は繩文時代からの系譜を引くものとされている（註16）。県内では2例知られておりその内一

例は弥生時代の埴丘墓の堅穴式石棺から出土している（註17）。碧玉製の管玉はいずれも1cm以下の小型のもので、石鎚山第1号古墳・第1号主体などに出土例がある。この管玉に関しては弥生時代後期後半から古墳時代出現期のものは、径4mm、長さ1cm内外を中心とし新しくなるにつれて太身・長大化すると言った見解もあり（註18）、これに従うと本墳のそれは全体的には古い様相であると言える。第6主体の土器棺は二重口縁の壺で口縁がほぼ垂直に立ち上がり胴部が卵形で底部は若干平底を残している。これは平底を残している点でやや古い様相があるものの全般的には県北の北房町谷尻遺跡・V期（註19）に、また県南では上東遺跡・龜川上層期（註21）の範疇でとらえられよう。共伴する高杯も短脚であり若干古相の特徴を残す感もあるがほぼ同時期と考えられる。よって古墳時代前期でも古相の部類に入ると考えられる。

## 2 近長丸山2・3号墳について

2・3号墳はいずれも方墳で規模も10m前後である。3号墳については削平され詳細は不明であるので残りの良い2号墳について考察してみたい。2号墳は地山を整形し周溝及び盛土によって築成されている。また本墳には立石などは伴わないが周溝内から河原石が散在的に出土している。この石の解釈については、周溝がある程度埋まつた状態で出土している事から墓前祭祠的なものであろう。ほぼ同規模の方墳で木棺は、鏡野町・竹田9号墳がある（註10）。この古墳は葺石を伴い主体は2つの粘土櫛・割竹形木棺で中央棺からは彷彿内行花文鏡や管玉、鉄劍などが出土している。出土遺物の組成や棺形式から言えば1号墳の第1主体に似ている。また本墳出土の鉄器はその多くが故意に曲げられているようである。その中に鑿頭式の鉄鎌がある。これは石鎚山第1号古墳・第2号主体の27本出土した鉄鎌の中に4例見られる。ただこの鎌はいずれも両刃で本墳の中には片刃もあり質・量的な面で大きく異なっている。またこれら鎌は弥生時代からの系譜を引くものでなく、古墳時代になって新たに一地域で作られ配布がなされたものとする見解もある（註21）。次に出土土器であるが、いずれも細片であるものの頸部に断面三角形の突帯がつく二重口縁の壺を復元する事ができる。このように突帯がつく壺は、周辺地域では見られず、山陰の鳥取県・長瀬高浜遺跡のI・II期（註22）に同様な壺がある。この壺の突帯は断面が台形状を呈しており本墳のそれとは異なっている。突帯の断面がしっかりした台形から三角へと変化したと解釈すると本墳の壺はこれらより新しいと考えられるが、いずれにせよ類例の増加を待ちたい。また底部が出土していないので全体像は不明だが他の器種などからして本墳の時期は、1号墳とほぼ同時期ないしはや後出する可能性が大きい。いずれにせよ時期差はさほど無いものと思われる。

## 3 近長丸山古墳群の形成と社会構造について

以上本古墳群の個々について述べてきた。ここでそれらをまとめてみたい。出土土器からすると本古墳群はほぼ同時期の所産である。ただ立地の面から言えば、頂部に作られた2号墳が斜面の1号墳より先行すると考えた方が理にかなった感もある。ここでは資料も少なく即断は

できないが両者は差ほど時間がたたない間に相次いで作られ、前期のある殷賈に墳形・規模などの異なる2者が共存していたのである。この事は両者の間に階層の違いを見いだせる。そして1号墳のような直径20mクラスの円墳がある程度普遍的に見られるものの埋葬施設・副葬品など様々な面で優劣をつける程の違いがある事は、その地域ごとに先進性があった事が伺える。しかも当時は鏡や多数の副葬品を持つ大規模な前方後円墳を頂点として社会が成立していた中で、このような直径20mにみたない古墳でさえこのように石を立て並べるだけの力と仿製ではあるが鏡を持つだけの力を兼ね備えている事で、その被葬者は地域の中のある程度有力な小首長層と考えられよう。本地域にこの階層性を当てはめてみると、90mの前方後方墳・植月寺山古墳（註23）を頂点とし→55mの前方後円墳・日上天王山古墳（註24）→20mクラスの円墳の1号墳→2・3号墳のような10m以下の方・円墳などが続く系統が考えられる。そして肥沃な水田耕作地帯を背景とした小地域を統合したのが本1号墳などの小首長層であり、そしてその小首長たちは小型の仿製鏡や玉類などを支配統制下の証しとして与えられ、埋葬施設などには古墳時代の息吹を取り入れながらもその代償として前時代の埋葬風習をかなり踏襲する事が許されたのである。そのため地的小首長層たちはスムーズに支配基盤を固めていく事ができ、津山のような山間部でさえ新しい時代の制度が早急に浸透していったのであろう。

- （註1）高畠知功・福田正勝「光坊寺古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15】岡山県教育委員会 1977年  
（註2）鎌谷守秀「西粟坂古墳群」最近の岡山県下における埋蔵文化財発掘調査概要の報告会】資料 1989年  
（註3）「下山手第4号古墳・下山手第5号古墳」遺跡見学会資料 三次市教育委員会 1991年  
（註4）小都隆・高倉清一「石塚山古墳群」広島県教育委員会 1981年  
（註5）岡山県新見市横見垣慈群などに見られる。下澤公明・友成誠司「横見垣慈群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告15】岡山県教育委員会 1977年  
（註6）都出比呂志「窓式石室の地域性の研究」大阪大学文学部国史研究室 1986年  
（註7）總社市宮山遺跡（長船比2.7）、笠岡市金敷寺墓山埴丘墓（2.9）など  
（註8）本古墳群の北1kmの所にオノ崎古墳群があり同様に河原石を使用している。中山俊紀「オノ崎古墳群」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集】津山市教育委員会 1988年  
（註9）福永伸蔵「共同墓地」東史復元6占墳時代の王と民衆】講談社 1989年  
（註10）今井堯・安川豊史・竹内幸夫「竹田埴墓群」鏡野町教育委員会 1984年  
（註11）上野徹・美作鶴野町十村妙見山古墳「古代吉備」第6集 古代古備研究会 1969年  
（註12）正岡龍太・高畠知功他「百聞川原尾島遺跡2」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56】岡山県文化財保護協会 1984年  
（註13）神原英郎「四辻十塚古墳跡・四辻古墳群」岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告3】山陽町教育委員会 1973年  
（註14）森浩一「古墳山十の小型内行花文鏡の再吟味」『日本古文化論』日本古文化研究所編 1970年  
（註15）清水廉二「古墳副葬品の諸問題」『考古学ジャーナル』No.321 ニュー・サイエンス社 1990年  
（註16）木下尚子・弥生定義勾玉考「東アジアの考古学と歴史」岡崎敬先生追憶記念論集 1987年  
（註17）岡山市矢掛治山埴丘墓、落合町宮の前遺跡から出土している。二宮治夫・浅倉秀昭・橋本悠司・高畠知功「宮の前遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12】岡山県教育委員会 1976年  
（註18）平井勝「殿山古跡・殿山古墳群」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告47】岡山県教育委員会 1982年  
（註19）高畠知功・井上弘船「谷尻遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11】岡山県文化財保護協会 1976年  
（註20）柳瀬昭彦・江見正巳・中野雅美「人・土束」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16】岡山県教育委員会 1977年  
（註21）松木武彦「前期古墳副葬品の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会 1991年  
（註22）西村彰彦他「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書」鳥取県教育文化財団報告書8】鳥取県教育文化財団 1981年  
（註23）光永真一「植月寺山古墳」岡山県史考古資料 1986年  
（註24）河本清「日上歟山古墳群」岡山県史考古資料 1986年

# 図 版





1. 近長丸山古墳群全景(南東から)



2. 近長丸山古墳群全景(南から)



1. 1号墳調査前風景



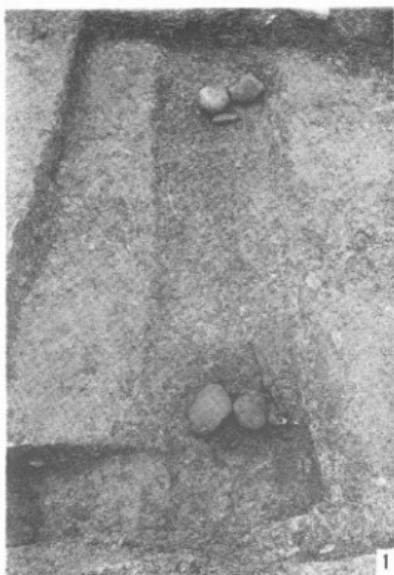
2. 立石・葺石状況(南から)



3. 立石・葺石状況(南東から)



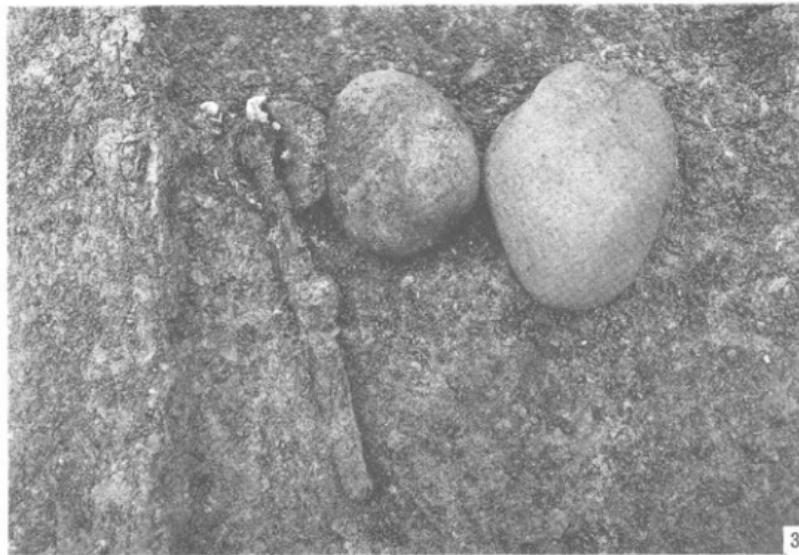
4. 1号墳調査風景(北から)



1. 1号墳第1主体(北東から)



2. 1号墳第1主体(縁床、南西から)



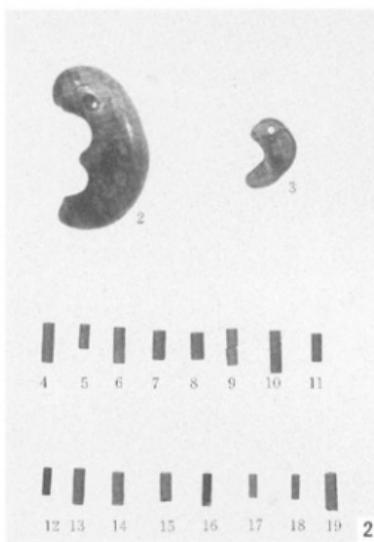
3. 1号墳第1主体遺物出土状況(南西から)



1

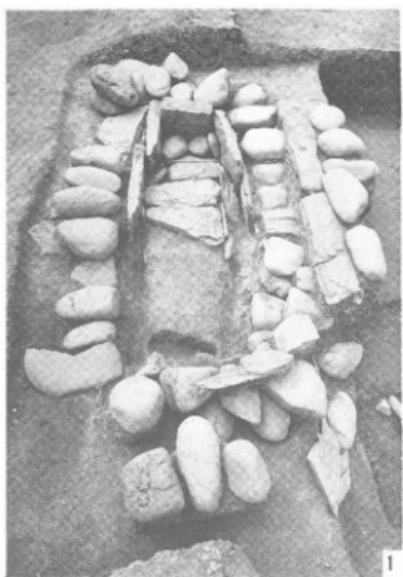
1

1. 1号墳第1主体出土遺物(1)



2. 1号墳第1主体出土遺物(2)

3. 1号墳第1主体出土遺物(3)

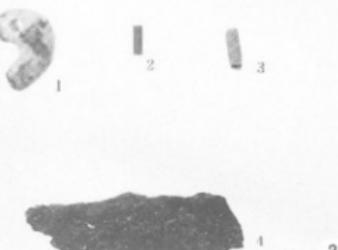


1. 1号墳第2主体(南東から)



2. 1号墳第2主体枕石周辺(南東から)

3. 1号墳第2主体出土遺物



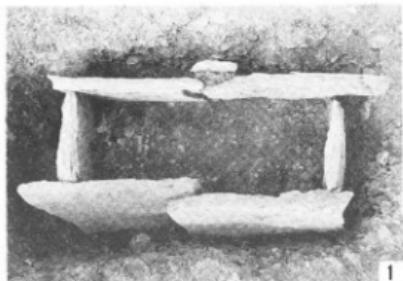
4

4. 1号墳第3主体(東から)

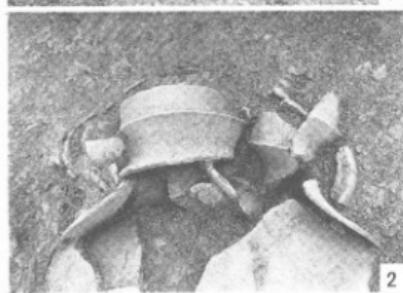


5

5. 1号墳第4主体(南東から)



1



2

1. 1号墳第5主体(南西から)

2. 1号墳第6主体(南東から)



3

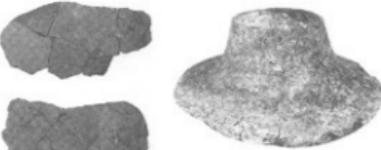
3. 1号墳第6主体(南東から)



4



5



6



8



7



9

4～6. 1号墳第6主体出土遺物

7～9. 遺構に伴わない出土遺物



1. 1号墳盛土状況



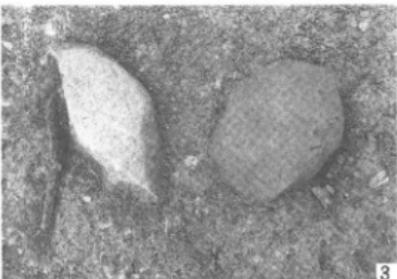
2. 2・3号墳調査前風景(南東から)



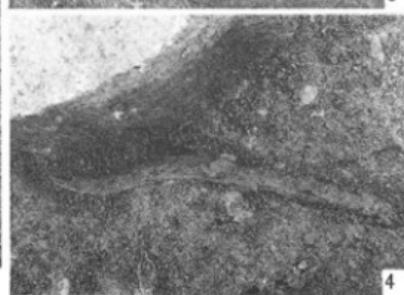
1. 2号墳全貌(北西から)



2. 2号墳中心主体(北西から)

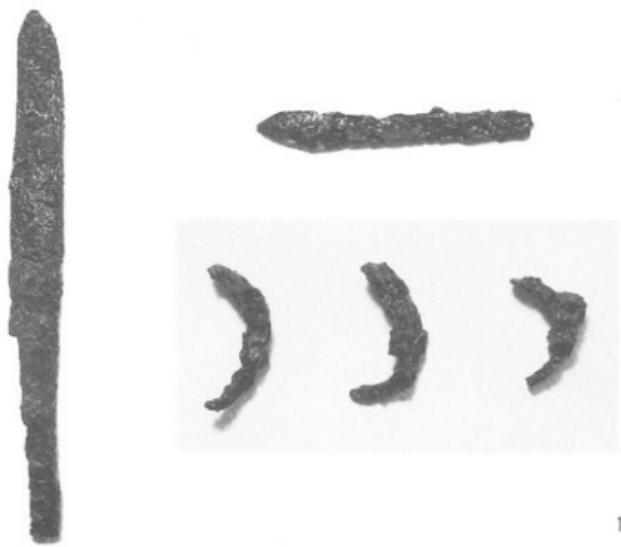


3・4. 2号墳中心主体出土遺物状況(南東、南西から)



4

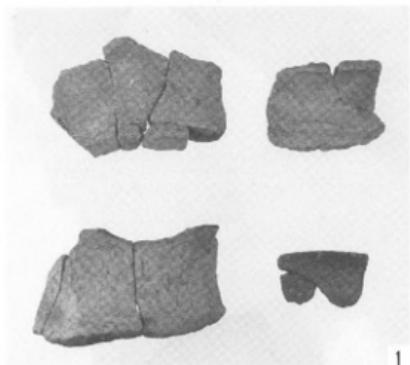
図版 9



1. 2号墳中心主体出土遺物



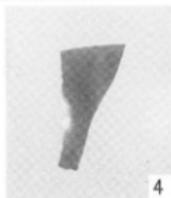
2. 3号墳全量(北西から)



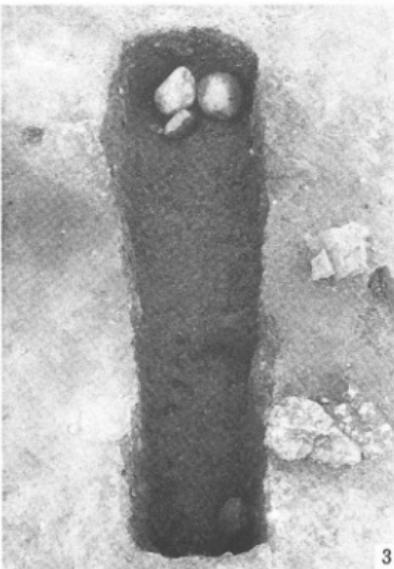
1



2



4

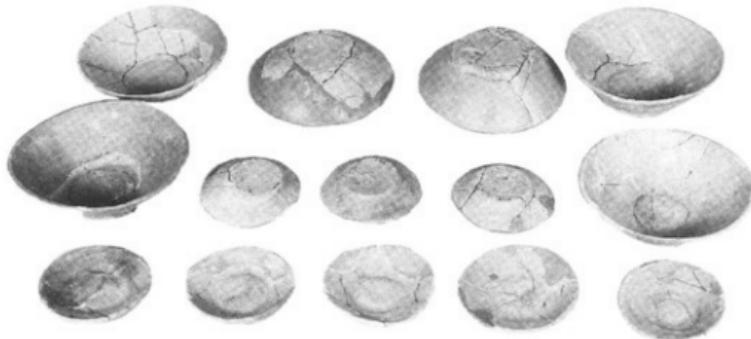


3

1・2、2・3号坑出土遺物

4. 中世遺物(1)

3. 石蓋土塚墓(南西から)



5

5. 中世遺物(2)

## 近長丸山古墳群

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集

平成4年1月31日

発 行 津山市教育委員会

岡山県津山市山北520

印 刷 松栄印刷株式会社

岡山県津山市平福27-7